

## 審査員特別賞

# 変化への対応力

立教新座中学校 2年 大川 琳太郎

二〇二二年二月二十四日、ロシアによるウクライナへの全面侵攻が発生した。私は戦争とはこんなに簡単に始まってしまうものなのかとひどく驚いた。戦争はいけない、誰も幸せにならない、絶対に繰り返してはいけないとこれほど世界中で訴えられ、教育されているのに。

自宅近くに外国語専門学校があり、丁度その時期母が仕事でその学校と関わりを持っていた。そこにウクライナからの留学生もいて、母は何度かその人と話す機会があった。彼は「急にこんなことになり悲しい。家族を日本に呼びたい。でも食料を買いに出かけた近所の人が銃殺されたそうだ。家族は避難するにも怖くて家から出られないと言っている。」と話したそうだ。

私は当たり前の日常を送って来た人々が、ある日突然命を脅かされる状態になるなど絶対に許されるべきではない、しかもその脅威が長期に渡っていることに酷く憤りを感じた。

だが、憤るばかりで実際はどうすることもできず数日が経過した。そんなある日ウクライナ情勢を伝えるニュースを見ながら、家族でウクライナから避難してくる人を受け入れられるかどうかを現実的に話し合ってみる機会があった。提供できる部屋は一部屋、人数は二人が限界だね、受け入れ後の生活サポートも必要だけど、それは外国語学校や役所にヘルプをお願いできそうだね、等。この話し合いにより、私の中で一気に支援という行動が身近になった。自分でも何か戦争で困っている人に対して、できることがあるのではないかと考えるようになった。そして、母の職場に手製の募金箱を設置させてもらい、募金活動を行った。知らない人に募金とはいえお金を下さいと言うのはとても恥ずかしく勇気の要る行動だった。声で訴えることはハードルが高かったのと、母の職場に常時いることはできなかったので、私はポスターで募金のお願いをした。一ヵ月ほどで五千六百八十二円集めることができた。こんなたくさんの額が集まるとは思っていなかったのもとても嬉しかった。集金の翌日、市役所で受付していたウクライナ人道危機救援金に募金して来た。このお金で少しでもウクライナの人が心穏やかになってくれることを祈った。

あの日から私の日常に対する意識が変わった。当たり前の日常を漫然と過ごすのではなく、今世界で起きてることに目を向け、それらの事情に対して自分がどのような行動を取ることができるのか常に考えるようになった。当たり前の日常はとてもありがたい。しかしそれが変化したとしても、自分はどうすべきかを考え、それにすぐ対応し、行動を起こすことができる自分でありたいと思った。